



二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版

小説 大杉和馬

挿絵 あいざわひろし

プロローグ	006
第一章 戦女神 マリス	024
第二章 裏切りの神 ロキ	036
第三章 淫魔の蛇神 ヨルムンガルド	054
第四章 滅びの餓狼 フェンリル	099
第五章 亡者の女王 ヘル	147
第六章 運命の女神 奈落の姉妹	194
エピローグ	247

## 登場人物紹介

Characters



### マリス

運命の三姉妹の末妹にして未来を司る女神。かつて引き起こされた神々の大戦では、最後の戦女神として戦った。純金の髪とブルーサファイアの瞳の心優しい少女。

### セレスティン

運命の三姉妹の長女にして過去を司る女神。マリスを最も可愛がっていた黒髪黒瞳の乙女。神々の大戦では戦女神の頂点として戦った。

### フェリシア

運命の三姉妹の次女にして現在を司る女神。常に冷静で感情表現が極めて少ない、銀髪と左右で色の異なる瞳が特徴的な乙女。セレスティンの補佐官でもある。

第五章 亡者の女王 ヘル

ガチャリ……。

漆黒の全身鎧とフルフェイスの兜に身を包んだ二人の男に両脇をがっちり固められ、マリスは古城の一室へと連れてこられた。最初に目が覚めた地下牢とは違う。豪華にして巨大極まるベッド、足首まで沈みそうなフカフカの絨毯、嫌味なほど華美な装飾品の数々。マリスからすれば溜め息をつきたくなるほど悪趣味な部屋だ。

「……やはり貴方なのね。ヘル……」

氷のように冷たい眼差しで自分を待ち受けていた存在を見つめる。ヨルムンガルド、フエンリル……ここまで続けば誰でも分かる。残るロキが産み落とした滅びの魔獣は一体、自分たち姉妹を最も忌み嫌ってきた。そして自分たちが恨みや怒りよりも、心の底からの侮蔑の念で見下してきた最悪の魔女が残るだけだ。

「……久しいのう。マリス……元気にしておったか？」

わずかな衣ずれの音とともにカーテンの向こうで女が身体を起こす。女と分かるがいやに低い声、爬虫類じみた冷たい声に宿る狂気じみた感情の波動に知らず身震いした。そんなマリスの様子に楽しげに喉を鳴らし、ヘルと呼ばれた魔女が周囲に控えた鎧の兵士たち

にカーテンを上げさせる。

純白のシーツの上に滝のように長く流れる灰色の髪、瞳は不透明な紅濁色、紛れもない美女と言っていていいだろう。洗練された美貌、完成され尽くしたプロポーション、だがその瞳に浮かぶ酷薄な輝きの何と冷たいことだろう。その冷淡な笑みの内に秘められた深く、暗い憎悪の闇に魂まで引き摺られそうだ。

「貴方は……変わらないわね」

「……………ふ……………く、くふはは……はっはっはっは!!」

呆気にとられたようなしびれの沈黙の後、思い出したような忍び笑い……それが次第に大きくなり哄笑となって室内に響く。

「面白いことを言う……。それは妾わらわにたいする皮肉かえ？」

「ヘル……………」

愉悦に歪んだ暗く赤い炎が、悲しげな翡翠の輝きと交差し合う。ヘル……滅びを司る最後の魔獣にして、黄泉の女王。その禍々しき二つ名に恥じぬおぞましき姿が彼女の神話の時代の本性だった。

だがマリスの言っていることは彼女の容姿のことなどではない。その魂の在りようが、歪み方が、壊れ方が少しも変わっていないなかった。

「ふん……お前は随分と変わったではないか？ 乳臭い小娘が少しはマシになったか……」

『お前も』兄者たちに女にされて色気つきおったか？』

クククク……喉を楽しげに鳴らし魔女は嘲笑する。見ていたのだろう。マリスがヨルムンガルドやフェンリル、自分の兄弟たちに犯し抜かれる姿を肴に、陶醉と狂気の美酒をあおっていたに違いない。

ギリリッ……悔しさと悲しみに奥歯が軋み、男たちに掴まれている両手が強く拳を握って震えた。そうだ、もう自分は戦乙女の資格はない。神として護るべき純潔を失い、魂まで汚された自分は女神ではなく。何より穢れなき乙女などではないのだから……。

「くくく……もう貴様にも分かるだろう。憎悪にまみれ、父と姉の復讐に縋る貴様になら……」

甘く暗い囁きが、腐臭に満ち、爛れた誘惑の音が響く。

「来るがいい……妾の元へと……貴様の力を、器を……妾は必要としているのだ。力が欲しいのだろう？ 仇を討つ力が、あの汚らわしい獣どもを打ち倒す力が……」

チロリと舌が真紅に濡れた唇の上を走り、滅びの愉悦に歪んだ美貌が戦乙女を自分と同じ復讐と滅びの道へと誘った。

「ヘル……かわいそうな人ね……」

「何……？」

憎悪、嫉妬、妄執……彼女が自分に向ける感情のほとんどが、かつて女神だったマリス

には理解できなかった。人として転生し、様々な淫虐に曝された今ならそれら負の感情のことも理解できる。だがその闇に溺れたい、まみれたいなどとは思わない。

「ふ……くっ、はははははッ!! まさか妾が貴様に同情されるとはのう」

「やっぱり……貴方も……」

憎悪が殺意に変わり、滅びの魔女を狂気へと燃え立たせていく。考えてみれば分かる話だ。女をメスと言いつける魔獣たち、自分の姪を息子たちに犯させる邪神、歪みきつた愛を説く彼らの中でただ一人だけ「女」として生まれたヘルが一体、どんな目にあつたのか？ 想像など……悲しいほど容易についた。

「黙りや!! そのような同情など要らぬ。妾を愚弄するでないわ!! 良いじやろう。妾に力を貸さぬと言うならそれもよい。こ奴らを前にしてまだ同じことが言えるかの？」

パチン……苛立ちに染まった瞳で妖女が指を鳴らす。するとそれまで一言も語らず、ただ黙ってヘル の傍らに立っていた鎧尽くめの兵士たちが動きだした。漆黒の兜の留め金を外し、顔を隠していた覆いを脱ぎ去っていく音が次々と響く。

「そ、そんな!! お前たちは……ううん、あ、貴方たちは……」

面を完全に覆っていた兜を脱ぎ去った男たちはその誰もが、マリスのよく知った者たちだった。それこそただの一人として例外がない。あまりの驚愕に両手で口元を覆い、新緑の瞳を見開いて彼らを凝視する。

勇者たちの魂……戦乙女たちが選別した偉大なる魂たち、死後の勇者を終末の戦いに召喚し、協力し、支え合い、背中を預けて戦った。彼らはそれぞれが、生前勇猛な戦士であり、あるいは優れた魔術師であり、卓越した軍師あるいは、無敗の將軍であつた至高の英霊たちである。

そして、彼らこそかつて自分が率いた勇者たち、父も姉も失つた自分に最後までついてきてくれた。何もかも失つた自分が最後に縋つた「戦友」と言う絆、彼らがいってくれたから自分はロキとの相討ちと言うあの時点で考え得る最高の結果を導きだせた。

「これは……これは一体どういうことなの!？」

悲鳴にも似た叫びが彼らから目を離せない少女の唇から漏れる。自分に視線さえ向けずに問いかけてくる戦乙女の無礼を咎めようとせよと破滅の魔女は楽しげに嗤つた。

「ほう……? 妾の二つ名を忘れたのかえ? クスクスクス……言っておくが彼らは正真正銘お前の知る者たちよ。偽物なんて紛い物を妾が用意するとも思つたか?」

疫病と亡者の女王、奈落の国・ニヴルヘイムの支配者。それではヘルは、彼らを蘇らせたいや、違う。生者となれば彼女の管轄から外れることになる。ならば、まさか亡者として現世に召喚した……?

「なんて……なんて……!! ガルズ……ゲイドナー……ワウエン、セウレイ……フオン……みんな……」

懐かしさのあまり胸が締めつけられる。誰もがマリスにとつて大切な思い出の中の住人だった。胸の奥から熱いものがこみ上げてきて自然に涙が零れ落ちる。

「いや……よ、そんな……そんなことって……」

ふるふると力無く首を振る。信じられない。信じたくない。

姉や父とは違う。それでも、同じくらいマリスの心の大切な場所にいた人たち。その彼らがヘルの下僕に、生きる亡者となって、自分の敵として現れるなんて……。目の前が真っ暗になり膝がガクガクと震え、力が抜けおちそうになる。

「ガハハ……マリスの嬢ちゃんは今変わらなず泣き虫だなあ」

「が、ガルズ……」

神である自分をまるで友人のように接した巨漢の戦士、その変わらぬ豪放な笑い声に、絶えるように目を向けた。この媚びることを知らない陽気な男の笑い声に、自分は一体どれだけ救われ、励まされただろうか？

「マリス様に対し無礼だぞ。ガルズ。本当にお久しぶりです。マリス様……」

「ゲイドナー……貴方は……」

礼儀正しい魔術師が巨漢を諫め、恭しく一礼してきた。正反対の性格と能力の二人だが、不思議とウマが合っていた。そのやり取りが本当に、泣きたくなるほど変わらない。

寡黙な槍使いの男は何も語らずに目だけで礼をしてくる。一番年下だった純朴な精霊使

いの少年のはにかむような笑顔が眩しい。隻眼の狩人、顔中に傷を刻んだ斧使い、誰も彼もが懐かしい郷愁を誘う。なのに……それなのに……、その彼らは今は敵なのだ。

「おやおや……誰かをお探しようだねえ？ マリスや」

マリスの視線が何かを求めて周囲を彷徨うのを見て、地獄の女王が意地悪げに問いかける。嗜虐の悦びに歪んだ美貌は何もかも分かっているとと言う風に、舌舐めずりをした。

「マリス……」

響いた低い声に怯えるように小さな背中が震えた。ゆっくりと声のほうに視線を向ける。

「ストール……」

かつて最も自分が頼りにし、最も心を寄せた赤髪の青年剣士の姿を捉えた瞳が揺れる。

戦乙女としての戦技や剣技を修めていても、実戦を……ましてや集団を率いての戦闘など知らなかったマリスに代わり、彼女の隊を率いていた実質の隊長と言つて良かった。

短く刈り揃えた赤髪、巨漢と言うわけではないが鍛え抜かれたその長身には筋肉がギツシリと詰め込まれていることをマリスは知っていた。

「……？ ストール……？」

だがその凜々しくも普段は絶えず優しい笑顔を浮かべていた顔はまるで彫像のように何の表情も浮かべず、瞳にはまるで精気がない。傍らに立つヘルが楽しげに喉を鳴らしながらその逞しい胸板にもたれ掛かっても何の反応も返さなかった。

「この男は本当に強情でね。最後まで妾の言うことを聞こうとしなかったのじゃよ。あまりに癪だったので心を凍らせてもらったがのう」

「ヘル……っ!! なんて、なんてことを……!!」

細められた赤眼を怒りに燃える瞳で睨み、叫び返す。激情に任せて殴りかかろうとするがガルズの太い腕に掴まれた両手はビクともしない。

「くくく……残念だったねえ。さあ、かつての勇者たちよ。褒美じゃ……その娘を、かつてのお前たちの主を思う存分抱いてやるがいいわ」

「な……っ!?!」

怒りに震えていた背筋が一瞬で凍りついた。何を……この魔女は何を言ったのだろうか？  
彼らが……自分を……抱く？

「な、何を言って……」

「へい、ヘル様のおっしゃる通りに……」

「ガ、ガルズ!?!」

背後から聞こえた巨漢の言葉に硬直した。次に自分の耳を疑い、弾かれるように背後を振り返ろうとする。だが、男に掴まれた両手に万力のような力が籠り、苦痛にその形よい眉をひそめ、動けなくなった。

「マリス様……我らは昔から、多かれ少なかれ貴方の中に理想の女性を見してきました」

マリスの前に一步進み出た魔術師が眼鏡を指で押し上げながら、冷淡に言葉を紡ぐ。その背後に控える勇者たちも、誰も魔術師の言葉に反論しようとはせず、どこか熱に浮かされた眼差しを戦乙女の少女に向けていた。

「まあ、貴方は……一人の男しか見ていなかったようですが……ね」

冷やかな視線をストールに向ける魔術師の言葉に首まで真っ赤になった。気づかれていた？ ずっと心の奥にしまい、その想いは表には出さないようにしていたのに……。

「そりゃあ気づくさ。俺らはずっとお嬢ちゃんを見てたからな。けどもう遠慮はしねえ」

あの頼もしかった広い胸板に抱きすくめられ、自分の胴周りほどもありそうな逞しい腕が背中に回る。

「うっ……くっ。いやっ、やめ、やめなさい……ガルズ!!」

ひどく力無い拒絶の言葉に加え、儂く身を振る姿は、マリスが心の底から嫌がっているようにはとても見えなかった。亡者らしからぬ燃えるような体温とわずかにアルコール、そしてヤニの異臭が鼻をつく、不思議と不快な気分にはならない。

「ほらマリスの嬢ちゃんおいで……」

「だ、だめ……!! うんんっ……いひやら……やめ……あんん」

そのまま強引に唇を奪い去られた。見開かれた翠の瞳が戸惑いと混乱に揺れ、巨漢を引き剥がそうと両腕に力が籠る。しかし背中に回った腕が柔らかな髪を撫で梳いていくと、

父親に抱かれるようなひどく懐かしく、安堵にも似た脱力感に身を委ねてしまいたくなる。  
(いや……こんな……でも……熱い……それに、こんなキスが気持ちいいなんて……)

無遠慮に侵入した舌が自分の口内で熱烈にダンスを誘っている。その技巧などよりも力強さと逞しき、何より強い情熱がマリスの理性と抵抗心を奪っていった。

酸素がわずかに足らずに頭の芯が熱さと息苦しさにボウツとなる。望まぬ快楽に散々溺れさせられてきた肉体は、マリスの心の中にある男たちへの信頼や好意と言ったわずかな妥協点さえ餌に無理矢理高まっていった。

マリス自身気づいていない。ロキの居城たる滅びの魔城、その最深部にいる自分がどれほど闇の毒に心身を蝕まれているかなど気づいていなかった。

「嬢ちゃんの唇……甘くて、すごく美味しいぜ……」

「……ふあう……駄目っ、そんな言わないで……」

ひどく優しく甘い囁きが胸の奥をくすぐる。強引に奪い取られたはずの唇が、自ら積極的に男の唇を啄み始め、おねだりするように自分から舌を伸ばした。

魔物や魔獣たち相手などでは決して感じることはない心の震え、汚らわしい蛇に奪われ、汚された唇と舌が、その埋め合わせを求めるように親しき男にしがみついていく。おずおずと伸びる舌が男のものに絡み取られ、相手の口内へとさらわれた。

んちゅぴちゅぶうんぷ……。

重なり合った唇の繋ぎ目から響く、ひどく淫卑な唾音に周囲の男たちの熱気も否応なく高まっていく。自分たちがかつて憧れた、決して思い届くことはないと諦めていた美しき花が目の前に咲いている。

「マリス様、失礼します……」

横から伸びた細い腕が捕らわれのマリスをさらう。唾液の架け橋を引いて別れ合った唇、何事か理解できずにぼんやりと瞳を向ければ理知的な瞳が自分を射抜いた。

「はあ……ゲ……ゲイド……ナー……？ はあん」

薄く開かれた唇から乱れた吐息が吐き出され、次に自分を抱きしめた瘦躯の魔術師の名を呟く。だが、すぐに別の唇との逢瀬に溺れ、紡ぐ言葉は熱く甘い喘ぎ声のみに取って代わられた。

優しく丁寧な口付け、ガルズの荒々しいそれとは違い、女の扱いを知り尽くしているかのような研ぎ澄まされた技巧にこらえようもなく酔わされる。菌茎が舌先でなぞられ、頭の芯がジンと痺れた。絡み合い、溶け合う唾液さえ舌に甘く感じてしまう。

（こんな……こんなひどい屈辱……みんなとの絆を辱められて……貶められているのに……なのに……なんで私はこんなに心地よくなってしまっているの？）

いやらしい唾音が、やたら大きく耳朶の奥へと響く。口の中がどんどん熱くなり、ドロドロに溶けてしまいそうだ。粘膜や舌が敏感になっていくのがボウッと霞んだ頭にも理解

できる。

背後から誰かがそつと自分の胸に手を伸ばし、赤く染まった耳朶とうなじに口付けを送った。熱い息が耳の奥をくすぐり、お尻にあたる熱く硬い肉の脈動に、身体の芯は浅ましい期待に疼き始める。

「んちゅ……んぷ……はああ……いい……いいの……うんっ」

入れ替わり立ち替わり男たちがマリスの唇を求めていく。卓越した技巧派だったり、情熱的な責め手だったり、稚拙だが一生懸命な健気さで求める者もいた。

どんどん胸が熱くなっていく。心と身体の両方が甘美な快楽に溺れ、肉体の芯がすっかり溶け落ち、先ほどから太股を伝う雫など勢いを増すばかりだ。両腕は相手の首に積極的に回り、痛いほどに尖りきった胸の頂を媚びるように背後から伸びた手へ擦りつけていく。「くくく……すっかり蕩けたようだのう。そうら、遠慮することはない。お前たち……マリスを可愛がつてやるがいいぞ」

ヘル言葉を合図として、逞しい腕がマリスの身体を横抱きにした。ちょうどお姫様抱っこの様な恭しさでかつての自分の主を抱きかかえ、優しく運んでいく。向かう先は純白のシーツが敷き詰められた巨大なベッドだ。

「い、いや……まさか……貴方たち……」

彼らが自分に何を求めているのか、一瞬で悟り顔を青ざめさせる。男の腕の中で抵抗し

ようと暴れるが、まるで愚図る子供をあやすように優しくいなされた。

軽い衝撃とともにマリスの身体を、柔らかいベッドスプリングが受け止める。少女が起き上がるよりも速く。複数の男たちの手が伸びると、彼女の身体を清潔な白のシーツの上へと縫い留めた。

「さ……マリス様。鎧をお脱がせしましょう……」

「そうそう、脱ぎ脱ぎしようねえ」

カチャカチャとフェンリルの手によって半壊した極光の鎧の留め金が外されていく。抵抗しようにも力を消耗し尽くした彼女の細腕では、歴戦の勇士である彼らの腕力には敵わない。何より、たとえ自分が万全の状態でも、彼らを傷つけるような力は揮えなかつたろう。

「みんな……お願い。正気に戻って……あの頃の優しい貴方たちに……」

何もかも投げ出して泣き叫びたくなつた。叶うならもう一度彼らと会いたいと思つたことは一度や二度ではない。だがこんな狂気に歪んだ邂逅など望んではいながつた。

「何を言っているんですか……マリス様」

そつとゲイドナーの手が細身に似合わぬ臂力で、少女の身体を抱えあげる。Mの字に開脚された足の間で準備万端、すつかり淫らに咲き乱れた花園が待ち望んでいたように開閉し、蜜を溢れさせながら姦通の瞬間を今か今かと待ち望んでいた。

「マリス様のお身体は、こんなに期待しているじゃないですか……」

「はっ、いや、離しなさい!! そんなこと許さな……ひっ!!」

まるで母親が幼い子供のトイレを手伝うように背後から両足を広く開かせ、その肉体をベッドに横たわるガルズの上へと運ぶ。氣丈に呼びかけていたマリスだが、自分の真下で隆々と天を衝く男根を見て、まるでか弱い少女のような悲鳴を上げた。

「嘘……嘘よ……みんな……嘘だと言って……」

初めて見せる。今にも泣きそうな顔で周囲を見回した。尻を汚された時も、純潔を奪われた時も、獣の仔を孕まされそうになった時も、ここまで打ちのめされなかった。ここまでするべくも、弱くもならなかった。

「くっ、ああああああ——ッ!!」

ズブリ……濡れた肉に固いものを突き込む卑音。悲痛に泣き叫ぶ心の嘆きと裏腹に、マリスの肉体はあっさり男を受け入れる。肉体の内側をせり上がってくる灼熱の塊に、喉を反らして絶叫した。

散々快楽の毒に解されたそこに痛みはほとんどなかった。だが、純潔を失って一晩も経っていない身体への負担は大きい。巨漢であるガルズの肉棒のサイズはその身体に見合ったもので、息も絶え絶えに伸びあがった上半身を痙攣させる。

「うっ、あつ、やめてガルズ……ゲイドナー。お願い……もう、もう……ひいああんッ!!」

激しい突き上げが開始し、ベッドのスプリングがギシギシと軋みを上げた。巨大な男根の上に跨がらされたマリスの身体がロデオさながらに勢いよく跳ねる。

被虐の騎手を責め立てる荒馬はがっしりと戦乙女の腰を両腕で掴み、立て続けに肉の殴打を子宮の入口へと送り込んだ。太い杭のような男根で秘所を貫かれたままの少女は逃げることも叶わず、その痛苦をわずかでも逃がそうと、両手を男の腹についてこらえる。だが、その程度のか細い支えなど、何の役にも立ちほししない。

「あつ、やつ、ふあう、んあああああゝゝゝッ!!」

激しい動きに首がガクガクと前後に揺れ、背筋が綺麗なアーチを描いていく。スカートが勢いよく煽られながら、淫卑に濡れ乱れた男との接合部を見え隠れさせた。

汚らわしい獣の性器ではない。堕ちたとは言えかつて信頼し、尊敬した勇者たちの熱い陽根。被虐に慣れてしまった心はその程度の救いにさえ光明を見いだし、愉悅に溺れた肉体は歓喜の声を上げて快楽を受け入れた。

奥襲を射抜かれるような鈍い衝撃とともに、痛苦は薄れ、それに呼応するように快楽の波頭が高くなる。稲妻と化した快感が神経中枢を幾度も直撃した。

ズツチユズツチユズツチユ……。

互いの繋がった場所から響く卑猥な水音の楽章が、耳朵の奥でうるさいくらいに木霊する。

全身から快樂の炎が噴き上がり、夥しい熱が子宮を中心にマグマのように湧き起こった。ガルの鍛えられた腹筋の上で恥ずかしい水たまりが湯気を上げながら広がっていく。

破損した鎧を脱がされ蒼い戦衣を纏っただけのマリスはまるで美しいドレスを纏っているお姫様のような。だが数々の暴虐によって右胸の部分は大きく破かれ、形よい白桃が零れ落ちてゐる。他にもあちこちに裂け目が入り、その下に羽織った純白のワンピースが覗く無残な姿は逆に男たちを燃え上がらせ、その嗜虐性と欲望に火を灯した。

「ガハハッ!! 何を言ってるんだ嬢ちゃん。こんな濡らしちまって……ほらもつともつと感じさせて差し上げるからな」

「や、やめッ……あひいっ!!」

髭面の男の真下からのひと突きに意識まで天高く飛翔させられそうになる。ゴポリと白く濁った本気汁が吐き出し、男を啜え込んだ桜色の粘膜がさらにキュッとときつく締まった。「そうですよ。マリス様……我々は貴方に悦んでいただきたいのです。さあ遠慮などなさらずに、もつと乱れてください。そのいやらしくも美しいこの身体で……」

眼鏡の奥に邪悪な知性を煌めかせ、黒いローブに身を包んだ優男は背後からマリスを抱きしめ、その両手で戦乙女の豊かな胸を揉みしだく。暴力性など微塵も感じられない。卓越した技巧と優しささえ感じる愛撫に胸の鼓動が大きくなった。

破れ目から零れ落ちた可愛らしい膨らみを壊れ物でも扱うように掌に包み込み、やんわ

りと転がし、持ち上げ、その突端を優しくくすぐる。逆の胸もまた蒼の胴衣の上からそつと撫でられながら小さく円を描いた。

「は……んんっ……ゲイドナー。駄目なの……お願い。これ以上は……あ、ああああ……」

魔術師の細い指先が織りなす右と左の異なる愛撫が堪らなく胸を熱くする。首筋にそつと口付けが施され、朱色のキス痕を白磁のキャンパスにまたひとつ刻まれた。下からの力強い突き上げで女体をグズグズに溶かされ、上半身に施される繊細な淫撫には心まで蕩けさせてしまいそうになる。

「いえいえ、では失礼しますよ。マリス様……」

ゲイドナーが懇懇に背後からマリスの耳元で囁く。淫蕩に蕩けかけた頭脳が疑問を発するよりも早く後ろの入口に熱く硬いものがあつた。

「いやっ!! ま、まさ……いはああああッッ!!??」

驚愕に肉体が硬直する。背後を振り向くよりも早く熱く猛る男の肉竿がマリスの菊門に滑り込んできた。すでに道をつけられていた戦乙女の排泄孔はいともあつさり男の欲望を受け入れ、肉洞が竿や返しで擦り上げられると会陰部をあのみ混じりの愉悅が駆け巡る。

「そんな……そこっ、そこは汚い……やあああっ、だめえええ……っ」

ヨルムンガルドの蛇ペニスに散々苛められ、責め尽くされた卑洞が悲鳴を上げた。誇りも矜持もズタズタに切り刻まれた肛虐の記憶、マリスの肉体で他人を初めて受け入れた穴

が怯えるように縮こまる。

「そんなことはありませんよ。マリス様のここはとても素晴らしい」

マリスの不浄の穴の中に居座った瘦躯の魔術師は両手でそつと少女の両胸を揉みしだきながら、背徳感に震える耳元に優しいなぞを囁いた。同時に熱い竿がズルリと先端近くまで引き出され、排泄の快楽に似た開放感にお尻が勝手に硬直する。

菊座と腸壁が痙攣するように収縮して男の肉棒を噛みしめ、ゲイドナーが堪らない快楽に顔を歪めて呻きを上げた。凄まじい快楽に味をしめた魔術師はさらにズブズブと肛虐の肉刀をマリスの菊孔へと納めていく。

「あぐうううう……」

呼吸を忘れたかのような息苦しさと同時に心をどす黒く染めるようなあの禁忌の感覚が舞い戻ってきた。前の穴に収まったガルの肉棒と薄い肉の壁を通して削り合い、ズンと鈍い衝撃が下腹部に突き刺さると真つ赤な火花が秘洞と卑窟の双方でいくつも弾ける。

「私は昔から女性のこちらの穴にしか興味が持てなかったのですよ……」

「ガハハッ!! マリス様は化け物どもに随分と開発されたんだな。尻穴でも感じるのかよ」  
下卑た笑いと下衆な言葉がかつて信頼した仲間たちの口から吐かれる、耳を塞ぎたい想いで聞きながら前後の穴を楽しまされた。

「いや、いやああ!! 言わないで……お願い。私はそんないやらしい女じゃ……はあんっ!!」

化け物たちの前では決して望んで見せようとはしなかった弱気な少女の素顔が早くも涙とともに垣間見える。男の腹の上で波間に揺れる木の葉のように翻弄され、金沙の艶髪を左右になびかせながら恥じらいに首をうち振った。

「あははっ……あのマリスがいい様だねえ。ねえ、ストールだつてそう思うだろ？」

毒々しい妖花を思わせる美貌に地獄の悪鬼もかくやの狂気じみた笑みを浮かべ、ヘルは傍らに立つ青年へとしなだれかかる。燃えるような赤髪も鮮やかな青年、マリスの隊を副隊長として率いていた凜々しい表情は今や彫像と化して何も語らない。

（ストールが見てる……私のこんな姿を……あんな女と……）

悔しげな表情を浮かべ、切なげな色を宿した新緑の瞳がかつて最も信頼し、心を寄せた男と憎き魔貌の女を見つめた。少女らしからぬ嫉妬にも似た想いが心を焼き焦がし、胸が締めつけられるような息苦しさを感じる。しかし浅ましい肉体はそんな純情な思いさえ燃料にますます燃え上がり、男を受け入れた不浄の肉洞にさえ熱と潤いを充満させた。

「余所見はだめですぜ。マリス様……貴方ばかり楽しんでませないで俺たちも……」

「いひひい……そうそう、俺らみんなの憧れだったんだ。仲良くみんな楽しんでませ」

隻眼の男がマリスの右手を掴んで自身の猛る分身を握らせる。顔中にいくつもの傷を刻んだ斧使いが逆の手を掴み取る。両手に感じる男たちの熱い欲望、激しく脈打つ鼓動まで柔らかな掌から伝わり、天井知らずに高まる被虐感がまた奥から熱い雫を溢れさせた。

(だめ……私……こんなに淫らになってしまつて……もう何が何だか……)

化け物たちに開發され尽くした身体が淫らに咲き誇り、その甘い、甘い蜜に男たちは誘惑される。ヘルによつて歪められた忠誠心と憧れ、そして願望。かつて互いに尊敬し、信頼の絆で結ばれていた勇者たちとのあまりに悲しい再会に心が碎けそうになつてしまふ。

相手は汚らわしい化け物などではない、好きか嫌いかと問われれば迷いなく好きと明言できた。家族にも似た愛情を抱き、全幅の信頼を置いていた男性たちと肌を重ね、抱かれてゐる現実に屈辱ではなく悲哀に、恥辱ではなく恥じらいに心身が燃え上がる。

「も、もう……許して……あはあ……こんなのおかしい……うくうああああッ!!」

全身で綺麗なアーチを描き、喉の奥から絞り出すような快楽と懇願の叫びを上げた。秘洞と卑洞の両方を射抜く灼熱の塊がゴリゴリと互いの存在を主張し合ひながら、内と外から粘膜を抉り抜く。会陰部は甘い闇の炎に溶け爛れ、子宮には幾百もの快楽の矢が、隙間なく突き刺さつてゆく。

「マリス様……凄いです。こ、これほどとは……」

「う、ううっ堪らねえぞ。嬢ちゃん……ぐ、おおっ!？」

極上の媚肉に、全身を満遍なく甘噛みされているペニスが、尿道を突き刺すような快楽の前に激しく身震いし、スパートをかけるように速度を上げた。

激しい動きに引き裂かれた蒼紺のドレスや純白のワンピースが勢いよく揺れ、スカート



が熱気を含んだ風にバタバタと上下に煽られる。巨大なベッドも幾人もの男たちの欲望に任せた動きに耐えきれず、ギシギシと断末の悲鳴を上げていた。

ドクン!! 左右の掌の上で、前後の穴の中で先走りにまみれガチガチに硬くなった肉棒たちが大きく脈動する。周囲に立ち込める熱気と情欲がグッとその密度を増し、激しい動きに全身に滲んだ汗が、マリスの甘酸っぱい芳香を周囲に振りまいた。

「ひふはあ……やあつ!? な、何を……ふうああああん!」

膨れ上がる熱気、鼓動、肉感、そのすべてがマリスにある未来を予想させて、紅潮していた頬を青ざめさせる。だが、そんな破滅の恐怖さえもすぐさま愉悅の海深く耽溺させられた。

脳と子宮を繋ぐ神経、その中心を幾度も往復する快樂の稲妻は、その電圧を天井知らずに増していき、高まる予感にブルリと肉の芯が身震いした。

未だ戦乙女としての誇りを維持する精神とは裏腹に、肉体は男たちに蹂躪されることを望み始めている。自分の内に煮えたぎる被虐の熱を許容できない少女の動揺を察知し、前後の穴を穿つ二本の男根が動きを加速させた。

(何かくる……? いや……そんな、まさ、まさか……?)

周囲からは早鐘の様な拍動が肌を通して伝わり、硬さと質量を増していく肉塊への期待に、散々剛莖でこそぎ研がれた粘膜たちを収縮させる。ドロリと接合部から新たに零され

た蜜は、すでに本気色に濁りきっていた。

ドピュドピュルルッ!!

最初に両手のイチモツたちが大きく膨らんだ。傘を開いた鈴口から迸る白濁の粘塊が、マリスの頬と鼻先にピチャリと着弾した。

「あふうううっ!!」

白熱のシャワーを浴びせられ、弓なりに振り返った全身が小さく痙攣した。熱い衝動が顔の上に幾度も飛び散り、思わず掌の中で震える両ペニスを縫るように強く握り締める。

柔らかい掌の感触に歓喜した二本の男根は、元氣よく跳ねまわりながら、白いエキスを戦乙女の上へと振りまいていった。マリスの背に広がる白金の髪にも白い精液が滴り落ちていき、手の中の肉棒が脈動するたびに赤らんだ頬に白化粧が施されていく。

ドクンドピュドプルルドプルルン!!

勢いを増す精液の雨、同時に胎内と腸内で巨漢の戦士と魔術師のペニスが勢いよく弾けた。焼けるような灼熱感が腔肉に沁みわたり、濃い糊のような粘塊の初弾が腸粘膜へとへばりつく。二撃、三撃……マリスを前後から挟んだ男たちの腰が痙攣し、そのたびに二つの肉洞に熱い衝撃が突きぬけた。

左右から、上下から、男たちの歓喜の呻きと吐息が途切れることなく吐き出される。私たちの歓喜に包み込まれ、それに同調するように自分の感覚まで押し上げられた。

「んふあああああうううううううううう!! あつ、熱い……熱いのおうう!! お腹も、お尻も溶ける……溶けちゃうううううううッ!!」

意識がどこまでも拡散し、無限に拡がっていくような恍惚とした飛翔感。白濁が溢れ返る子宮の中で、真つ赤な火花が幾度も爆ぜる。それはマリスの中で生まれて初めて、嫌悪や恐怖よりも歡喜が上回った瞬間だった。意識は本当の意味で初めて味わう絶頂と言う至高の美酒に深く、強く酩酊していく。

「あはあ……ひい……んあ……いい……ふううん」

高々と……一体どこまで打ち上げられたのか、想像もできない高みにある意識は簡単には降りてきてはくれなかった。

「凄いいれっぷりだったね。嬢ちゃん。そんなに俺たちのものを気に入ってくれた？」

巨漢の男が自分の胸の上で脱力し、荒い息を吐くマリスにそっと囁く。その髪に指を走らせ、精液でべたついた金糸を弄んだ。

「あ……あ……? わ、わたし……?」

ぼんやりと焦点を失っていた瞳がゆっくりと力を取り戻し、自分を見つめる男を見つめ返す。自分が曝したはしたない痴態と本音を思い出し、消え去りたくなるような羞恥に真っ赤に染まった顔を背ける。だが、深々と男根で貫かれたままの足腰はまるで役に立たず、わずかに腰を浮かせることもできない。

「ひあああん!!」

ズルリとマリスの胎内と直腸から柔らかくなった肉棒が引き抜かれ、ぽっかりと口を開けた空洞からまだ温かい精液が溢れ出てくる。弛緩した身体の下から巨漢が抜け出し、背後に居座っていた魔術師も身体をどけた。

ぽっかりと身体に空洞ができたような空虚感が下半身を支配する。ようやく解放された少女は、荒い息をつきながら支えを失ったままベッドに倒れ込もうとするが、それを別の男の身体と腕が受け止めた。

「まさか、あのマリス様がこんなにエッチだったとはねえ。ほらほら、休んでる暇はないからね。次は俺らの番だよ♪」

新たな男が精液に濡れたマリスの顔を覗き込む。背後にもまた別の男が近寄ってくるのを心配で感じた。

グチュリ……精液と愛液、加えて腸液が攪拌される粘ついた水音。ほんのわずかなインターバルを置いて、だらしなく口を開けたままの秘所に新たな肉棒が埋め込まれ、後ろの穴には、顔立ちに幼さの残る少年が自身の硬く熱いもので栓を施した。

「そ、そんな……も、もう……ふうあああゝゝゝっ!! いやあ、はひいい!!」

ズドンっと乱暴な突き上げ、真下から大砲で奥壁を穿たれたような衝撃に息がつまり、背筋を反らして硬直する。そのままマリスは軽く達してしまい、喉を反らし、舌まで突き

出したアクメ顔で痙攣した。

ひくひくと男を啜え込んだヴァギナが歡喜に噎び泣きながら涙を流す。背後では自身を締めつけられた少年がこみ上げてくる射精欲求をこらえようと歯を喰いしばった。

「くうっ……だ、駄目だよ、乱暴にしちゃ……マリス様には優しくしてあげなくちゃ……」  
背後の少年はそっと胸を優しく絞り、円を描くように捏ねまわしながら、お尻に突き立てた男根で8の字を描くように刺激する。絶頂に研ぎ澄まされたマリスの神経は、直腸内の少年の肉棒の動きを鮮やかにマリスに伝えてきた。

絶頂に達したばかりの身体は、あつさり官能の炎を再燃させ、高々と飛翔した意識と肉体を引き摺り戻した。

「ふうひんんッ!? そ、そんな……ワウエン……なの? まさか貴方までお尻を……ふぁ……いや、あはあああつ!!」

「マリスお姉ちゃん……ずつと憧れてたんだ。お姉ちゃん……ううっ、お姉ちゃん……」  
幼い精霊使いの少年、弟のように接してきたあの無垢な少年に、尻を犯されるといふ極限の背徳感と恥辱に懊悩する。少年は外見に似合わぬ技巧でマリスの尻を責め立てたかと思えば、自分の幼いペニスに跳ね返ってくる快感に夢中になって腰を振った。

「だめよ……や、やめらさい。ワウエン!! この……ひういん……そんな汚い……あつ、あつ、あはああつ!!」

強烈な挿肛に、小煩い小言を黙らされる。真後ろから襲いかかってくる肛悦の業火に、狭い腸窟が焼き焦がされ、痛々しく拡張された菊座は、注ぎ込まれた精液と腸液を潤滑液に柔らかくほぐされていく。真っ赤に爛れた直腸の粘膜が卑しい官能に泥酔していった。

(そ、そんな……わ、私……こんな子にお尻を犯されて……感じてる?)

自分よりもはるかに年下の少年の尿管に、為す術なくお尻をメロメロにされてしまう悔しさと羞恥にただでさえ赤い顔を、さらに真っ赤に染め上げる。

お尻の中が熱い、燃える、溶けてしまう。一度悦びを教え込まれた不浄の穴はその禁忌の快楽を忘れなかった。年下の少年の体温が、鼓動が、その肉茎から直腸を通してマリスに伝わってくる。お尻の中から熱と鼓動が彼女の心身を激しく揺さぶり、まるでアナルから、自分をいのように操られているような惨めな気分陥った。

「ほらほら、手元が留守になってるぜ？」

「わしらのことも忘れてもらっては困るのう」

一度目の手淫が終わり、空いていた両手にも別のペニスたちが握らされる。ぬるぬるとした精液に濡れた手、新たな先走りの液が柔らかな掌に塗りこめられていった。

手の空いた者たちも自らの手で肉棒を抜き、マリスの姿をオカズにして手淫へと耽り始める。もうもうと湯気さえ立てそうなほどに立ち込める牡と牝の性臭に、意識が前後不覚に陥っていく。耳朶が接合部から絶えず聞こえる粘液音に苛まれ、ウットリとするような

絶望感に魂が溺れていった。

グチュップ、ズチュプ、ヌチュルプ……。

「ふいんっ、あはあん……いひい……気持ち……ちが、ちがう……ううん!!」

否定と肯定がない交ぜになった虚ろな喘ぎ声がただ漏れる。もう自分でも何を言っているのか分からなかった。この感覚にどこまでも溺れていきたい。何もかも忘れ、親しき人たちに囲まれ、悦び、悦ばせ、永遠の墮落に酔い痴れたかった。

猛り狂う肉棒がマリスの排泄孔を犯し、尻穴から掻き出される肉棒に付着した精液と腸液が、菊座の入口を濡らし奏でる卑猥な水音が長く尾を引く。根元まで男根を咥え込んだヴァギナに針金のような陰毛がチクチクとあたり、それが包皮から覗く秘核を掠めては甲高い絶叫を上げさせられる。

「あつ、ひい、も、もう……やだああ……お尻も……あ、アソコもお……もういやらの……おかひくなっちゃう……」

力無く振られる首に精液を含んで重くなった金髪が揺れ、無残に片折られた翼のヘルムがカチカチと金属音を奏でた。未だ固さを衰えず膣内に収まったままの男根や、両手に握ったペニスも、再びその熱と質量を増していくのが分かった。それでも抜いて……と言えない。嘆く心と裏腹に快楽を知った肉体がそれを望んでくれない。

真下からの突き上げ、背後からの突き込み、ベクトルも大きさも違う二つのエネルギー

がマリスの胎内で衝突し、眼も眩むほどの真つ赤な閃光を幾度も散らす。血が出そうなほど赤く染まった乳首からは、心臓を射抜くような刺悦が乳房の中枢腺を串刺しにした。

一度上り詰めた階段を降りきらないうちに、また無理矢理駆け上がらされた。頂への距離は当然のように先ほどよりも近く、低い。瞬く間さえなく頂点が抱く眩い輝きが臉の裏へと映った。

「おおおっ!？」

少年と中年の男、親子ほども年の離れた二人がマリスを挟んで快楽の呻きを上げる。

柔らかくほぐれ、愛液にふやけきった膣肉は絶頂を求めてねだるように肉棒へとむしやぶりついた。菊座の周囲の筋肉などいつ覚えたのか、真綿で締めるような収縮を断続的に少年の肉棒へと送り込み、射精を強要している。

「いく、いくぞお、マリス様……射精しますよ」

「お姉ちゃん……マリスお姉ちゃん……僕……僕もう……っ」

絶頂寸前の戦乙女を道連れに、根元から湧き上がる射精衝動の赴くままに最後のひと突きを子宮と直腸深くに穿ち込む、腸壁も、膣壁も、子宮全体さえも激しく揺さぶられマリスは狂気しながら快楽の大海へと身を躍らせた。

ドプルルッ!! ドプシュルル!! プシャアアッ!!

四方八方から浴びせられる十人分に届こうかと言う熱烈な子種汁の殴打、火傷するので

はないかと錯覚するほどの焦熱感が全身の肌、髪に、衣服に染み込んでいく。

「あふうひいあああああゝゝゝ、ひやつ、ひやめえええ——ッ!!」

もう呂律さえ回らないのか？ 意味をなさない言葉を叫ぶマリスの開かれた口に次々と飛び込む精液のミックスジュース。舌を、喉を潤していく白濁の粘精に、喜悅の咆哮が少女の唇より放たれる。

「オオオオオオオ——ッ!!」

幾人もの男たちのエキスが降り注ぐ中、年齢の違う二人の男たちも同時に獣の雄叫びを上げた。ぶわりと獣性を帯びた熱気が少女を包み込み、クパッと体内に居座った二匹の獣がアギトを開く。

「ふうおあアオあああ——ッ!! ら、らめええへえええゝゝゝつ!! 凄ひいの……凄すぎてへえエエゝゝゝ!!」

ドビユウウツ!! ビュシユルル!! ドクンッ!! ドクンッ!!

腸内に未だ半分以上残っていた精液が、勢いよく奥に押しやられた。子宮口をこじ開けんばかりに轟いた精の砲撃に子宮全体を刺激され、破裂するんじゃないかと恐怖する。夥しい量と質の精液は小さな子宮に収まりきらず、膣道を勢いよく逆流した。

火山の噴火をその身で味わう少女が、灼熱のマグマとともにその意識を天空高く打ち上げられる。一度目の絶頂などはるか下方に置き去りにし、意識に浮かぶオーロラの夜空を



どこまでも駆け抜けていった。

「あつ……ひい……ふう……ああん」

途切れ途切れの言葉は意味をなせずに、酸欠の金魚のように喘ぎながら全身を痙攣させる。愉悅の落雷に焼き切られた脳細胞がグズグズに形を失い、自分と言う存在がどこまでも闇の中へ拡散していった。

ゴポリと大量の牡汁が、緩んだ女陰と菊座から零れ落ちる。顔に降りかかった精液が、額から鼻先を伝って艶やかな唇に、そして酸素を求めて開かれた口から中へと流れ込んでいった。苦みと酸味が混じった味が舌を刺激し、思わず喉を鳴らして飲み下す。

「く……くははははっ!! いい様だねえ、マリス……さ、そろそろ頃合いか」

快楽に酔い痴れた表情で、ただただ息を継ぐしかできない少女を眺め、これ以上ないと言った楽しい笑い声を上げる。絶望に喘ぎ、底の見えない深淵でもがく少女の姿がこの魔女にはよほど面白かったらしい。

満足し尽くした魔女の一言で、それまで異様な熱気に包まれていた空間が凝固する。氷点下以下まで下がる熱意。それこそ、波が引くように唐突に男たちが離れていった。ただ一人取り残されたマリスが、操り人形と化して表情を無くしたかつての仲間たちを見回す。

「はあ……ふあ……ひいあん……ううん」

愉悅に未だ溺れる少女はその様子に気づくこともできない。そんな無残に汚された少女

に、ただマリスの様子を窺っていた男が動きだす。力無く横たわっていたマリスの肢体を抱えあげた。無遠慮に抱えあげられ、想い人を虚ろな瞳で見上げる。

「さあ、ストールよ、穢れたかつての主を少しは清めてやるがいい」

何も感じさせない。何も感じることでできない彫像が虚ろな瞳で自分に近づいてくる。どこかで手にした布きれをグッとマリスの秘部に押し付ける。

シュッシュッ……くちゅくちゅ……

布地が肌の上を滑る削過音とひどく粘り気の強い水音だけが寝室に静かに響く。片足を持ち上げられ、曝け出された自分の性器。それを決して少なくない好意を寄せた男性に見つめられる。それも勇者たちとは言え、他の男たちに犯された後の穢れ尽くした身体だ。ほんのわずかに戻った理性が、あまりの恥じらいと悲しみに頼りなく泣きながら懇願する。それでも局部に受ける愛撫は狂おしいほどに心地よく、もっと、もっとと二度の絶頂を体験したばかりの肉体は求め始める。

「ふあああ……やあ……だめえ……ストール。あああ……お願いいい、そんなことしない  
れえ……いやあああ」

清潔な布きれが男たちの精の残滓とマリスの愛液を吸ってすぐに冷たく重くなる。男は激しい情事を物語る強烈な異臭を氣にした風もなく、少女の痛々しく拡張された性器や肛門を拭っていった。

(もういや……こんなの……こんなのってない。)

舌を噛み切りたくなる羞恥に耳まで真っ赤になった顔を隠すようにベッドに埋める。だがそんな清純な少女の肉体は食欲に絞りに絞った男や獣たちの精液を後から後から吐き出し、それどころか新たな恥蜜さえ零し始めた。

「あはん……お、お願ひストール。昔の……むらしの貴方に戻って……くふううっ!!」

かつて憧れていた叔父に裏切られ、尊敬した父を失い、姉たちまで死なせてしまった。そんなマリスの荒んだ心を闇から救いあげてくれたのがストールや仲間たちの存在だった。どす黒い復讐の念に溺れ、自暴自棄に走ろうとする愚かな戦乙女を幾度も慰め、救い、時に怒鳴りつけてでも諫めてくれた。

地獄のような終末の世界で自分が心を失わずに戦い抜けたのは彼らがいてくれたからだ。転生しても彼らとの決して色褪せることのない思い出が心の中には消えずにある。だからこそ一人になろうと人の世界のために戦おうと決意した。それなのに……なのに……運命はこんな残酷な結末を自分に見せつける。

「くっ、はぁ……ひいうっ……そこはもういいのお……もういいっいたらぁ……ああぁぁ」  
飽きることなくぬぐわれていくマリスの女性器からはいつしか男たちの精液は姿を消していた。しかし、黄金色の若草を濡らす水気は乾く様子さえ見せず、それどころか泉の奥からは新たな蜜が尽きることなく補給されている。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**